

ユダヤ教とキリスト教は他の主だった宗教的伝統とは異なり歴史というものに大きな関心を払って来たということとはよく主張されることである。ユダヤ教とキリスト教はその独自の見方に従って世界というものはその性格上基本的には歴史的なものであると考えるに至ったのであり、従って世界は恒久的かつ静的な構造をした不変の存在であるとも、或いは又万物がそこから出てそこに帰するところの無というものが不斷に変化してゆく表現であるとも考えなかった。従って他のあらゆるものが依存するところの根本的実在は一つの歴史的主体 (historical

宗教の歴史性

——キリスト教、仏教、及び他の諸宗教の出会いの場——

ゴードン・D・カウフマン

真 正 裏 (訳)

agent)、つまり神 (God) と見なされ、その神は世界とその内容を始めて創り出したばかりでなく、全ての有限なものが経なければならぬ歴史的發展の過程をも支配している。そして世界は神が世界のために定めた終末論的目標 (eschatological goals) の実現に向かって進行しているのである。特にキリスト教は神が人間イエスに顕現したという主張と共に、究極的なものが歴史の偶発性と過程に深く関わるその関わり方を強調して来たのである。そして更にキリスト教はこの様な点を強調するため、歴史の中で生じた人間の苦難を描く墮罪 (Fall) 及び

罪(sin)という教義を用いると共に、神の王国を天国と同様に地上にもたらすという救済の望みをも説いて来たのである。

この様に強調することがユダヤ教とキリスト教の伝統を或る意味でユニークなものにするのだとか、又或る人が主張した様に、他の偉大な宗教よりも一層意義深いものにするのだという様な主張の是非を私はここで論じようとしているのではない。又、その性格上、基本的に歴史的存在であるキリスト教の一解釈を私はここで試みたいと思うわけでもない。私がやりたいことは、宗教の本質と宗教的思考を理解するために、人間の歴史性を根元的に解釈すること(a radical interpretation of human historicity)の意味を明確に説明してみることである。

例えば、私の書いた「組織神学」(Systematic Theology: A Historicist Perspective, 1968)の中で例証されている様に、私は初期の神学研究作業においてこれらの諸問題を現在ほどには根元的に理解していなかった。当時私が歴史的又は歴史主義的世界観(a historical or historicist world-view)をこの様に見なしたかというならば、それ

は、存在するもの全ては歴史的過程のなかにあり発展の過程の中にあるのだとする、世界、人間、実在などについてのある特別な理解又は描写に過ぎないのだと考えたのである。私はこの歴史的又は歴史主義的世界観を、多かれ少なかれ、事物にかんする客観的な描写又は考え方として受けとめたが、それは人が描写してみようとするかもしれない他の世界観と同様、単に取ったり捨てたり出来る様なものだったのである。実在を歴史主義的に表現することは特別な意味でキリスト教信仰に属するもの——あるいは少なくともキリスト教の伝統から出て来たもの——であり、それ故に、歴史主義的実在観は人が神学者として作業するための視点であったと同時に、その視点を統一し、明確なものにし、解釈することが神学者の任務でもあった。かくして、世界や人間生存を、多かれ少なかれ歴史的又は歴史主義的に理解するということは、キリスト教神学者が研究作業をするための「所与」の一部であったわけであるが、その所与とは、ある仕方

た。

一つの歴史主義的視点が意味したことは、信者であり神学者である我々人間は我々自身歴史的過程のただ中に身を置いているのだということであり、又それ故に我々の態度、価値、観念などの全ては決定的に我々の歴史的

すことのみを関心事としたのである。つまり、この様なやり方で伝統というものを今日の時代にふさわしく有意義なものにするのを助けたのである。

文脈によって条件づけられているのだということ、この様なことを私は認識したのだが、このことがキリスト教神学と他の宗教的思想を理解する上にどんな意味を持っているのかということについての私の認識は充分ではなかった。他のたいいていの宗教思想家と同じ様に私が想定したことは、宗教思想のもつ第一の関心事は、その思想を育んだ特殊な伝統を打ち出し、それを周到に分析すること、そして又それぞれの新しい世代が直面する諸問題に照らしてその特殊な伝統を解釈又は再解釈することであった。ところが、人間の歴史性の事実を見ると、この様な(学問的)行為が疑問視されなかったばかりでなく、その行為が厳密にはいかに続けられるべきかということについてはあまり多くの示唆は与えられなかったのである。神学及び他宗教の思想は単に伝統の中で学問的作業を行い、その伝統の理解可能性(intelligibility)を示

確かにこの様な考え方には正当化される面や正しい面が多くあり、殆んど宗教思想家はこの様な路線に就いて研究作業を続けているのである。しかしながら、この様な見解は私達が自分達の歴史的伝統を背負って生きているということ的前提にしながらも、次の様な事実がもつ完全な意味あいを理解しないのである。つまり、私達の歴史を創るのは私達人間なのであるということ、又、歴史的伝統によって形成され育まれる人間存在であるということは、とりもなおさず人間自身が作り上げて来た様式(patterns)と構造(structures)によって形成されたり支えられたりする人間であるということであり、その様式と構造も人間が大幅に再構成(reconstruct)したり変更(transform)したりするかも知れないもの、いや実際に、ある状況の下で人間が廃止(discontinue)したり廃棄(destroy)したりすることが絶対に必要であると見なすかも知れない様なパターンと構造なのである。(こ

の様な事実のもつ意味を伝統的宗教思想は理解しないのである。宗教思想に関するこの様な伝統的な考え方はその研究の立場と意義において根本的に保守的である。つまり、本質的に言って宗教的伝統を過去の世代から現代の世代へと引き渡す (handing over) 過程の一部だけが自分の任務であると心得ているのである。人間生存にとって伝統が大切であるということは確かに私達人間の歴史性のもつ一つの意味ではあるが、そのことが宗教の理解にとって最も根本的なものではけつてないということに私は気づくに至ったのである。

この問題を今少し深く掘りさげるために、私は人間を完全に歴史主義的に理解することがどんなことなのかということを要約してみたいと思う。この様な見解に立つならば、我々の生活のパターンとか儀礼行為、習慣、価値(観)、観念、思考や瞑想の方法、世界観など、これらの全ては歴史の過程の中で人間によって創り出されて来たものであると言える。非常に異なった生活様式、非常に異なった構造をもった役割りと制度、非常に異なった宗教的実践や体験など……これらは全て異なった人間社

会や異なった歴史的时代の中で発生したものである。そしてこのことが意味することは、これらの社会や歴史的时代に成長した男女はそれぞれ異なったやり方で人間形成を行い、異なった技術、関心、欲求、異なった様式の人間関係を持ったということである。簡単に言うならば、彼等(男女)は他の社会や時代に成長した場合とは全く異なった人間となったのである。この会場に居る我の一人一人が仮に、例えばインドの村で低いカーストのヒンズー教徒として成長した場合、或いは中国中央部の自治体で一個人として成長した場合、或いは、ローマ皇帝の家族の一員として成長した場合、それぞれ全く異なった人間となったことであろう。

歴史主義的理解に従った場合、人生において重要と思われる——いや実に重要なことである——のは、大まかに言って我々がその中で生きる文化の機能であり、又我々が社会において果たすべく望まれている役割の機能なのである。善い人間生活とは何かという概念は、実際に意識された文化的・宗教的欲求 (felt cultural and religious needs) と関連しながら一つの文化の歴史の中で発展する

のであり、その様な文化的母体の中に出現する人間は、それぞれその文化的・宗教的観念と関連しながら自身自身を考えた形形成したりするのである。どんな徳目が強調され、どんな悪徳が避けられるかは文化的・歴史的に見て相対的なのである。つまり、いかなる人間活動や芸術が美しいと評価されるのか、又は大切にされるべきか、又は奨励されるべきか、などということはその文化によって決められることなのである。真理に関するいかなる主張が信用出来るものと見なされるか、いかなる様式の社会組織が正しくかつ適切なものと見なされるか、又人間の仲間をどの様に扱うことが正義にかなう善いことであると信ぜられるのか、など、これらの全ての価値や理想は人生の方向づけと指導を与える (orient and guide human life) と共に、人間が直面するさまざまな可能性を評価するための基準の役割りを果たすのである。そしてその価値と理想は異なった歴史的・文化的状況の中で異なった形をとり得るのである。もし我々が人間は根本的に歴史的な存在 (radically historical beings) であるという考えを真面目に受けとめるならば、世界における

人間のあらゆる願い、望み、そして人間理解の方法などは、それらの出現をもたらした社会歴史的状况 (socio-historical context) に関連しているのだということを我々は理解することになるのである。人間は誰でも食事をする。つまり人間は生き残るために食べなければならぬ。しかし人間は誰も他の動物の様に単に食物を消費するだけではない。すなわち、人間は箸、ナイフ、フォークを使って食べたり、或いは、例えばこの様な器具を全く使わない場合でも、右手を使って左手を決して使わなかったり、食品の一部又は全部を料理したりすることがある。又特別な香辛料や調味料を使って調理するとか一日に三食を規則正しく摂ったり、二食や一食にしたり、文化に基づいて定められた時期と方法で断食したりすることもある。又他の文化では嫌われたり毒物と見なされる特殊な野菜や肉だけを食用として受け容れることもある。その他多くの例を挙げることが出来る。我々の行為は疑いなく常に生物学的欲求に対する反応と見られるが、ほとんどどれをとっても人間の行為は文化に基づいて形成されるのである——そしてそのことは人間の行為

が歴史的に見て相対的であることを意味している。このことはなかならず宗教と呼ばれるものに関して真実なのである。

人間の言葉と自己意識が歴史の中で徐々に発達するにつれその行為は新しい局面を迎えたのである。世界に関する統一的な概念または像がより一層想像力のある詩的な人間(the more imaginative and poetic individuals)に現われ始めたのであるが、その世界像は人間生存の状況(the context of human life)を理解可能であり、把握可能である様に思わせたのである。すなわち、その世界像は人間に生存の状況があるかをより良く認識し理解する力を与えたのであるが、その結果人間はその状況に対してより効果的に適応し、その状況の中でより効果的に生きることが出来たのである。同様に現われ始めたのは、人間とは何か、人間の最も強い欲求は何か、これらの欲求を充たす方法は何か、ということについての考えである。人間と世界に関するこの様な考え方の最も早い形は明らかに物語りや詩や歌であり、これらは世代から世代へと語りつがれ歌いつがれた。この様な物語り、詩、

歌などは人間生存に関する想像的画像(imaginative pictures of human life)を提供し、人間が直面しなければならぬ諸問題、果すべき任務などを示した。つまり、人間男女はそれらによって自分達の住む世界がどのようなものであるか、人間の実存においてどんな力又は存在が取り扱われねばならないか、ということに関する観念をもつことが出来たのである。この様な一連の物語りや歌をくり返し告げることにより、人生の意味を深く考えるための状況や人生の意味を詳しく述べるための状況が与えられ、この結果、世界と人間についての理解をさらに明確にするための状況が与えられたのである。

人生というものは例えていうならば、人が無事家に帰ろうとして途中野獣や悪い怪物のいる危険な所を通って行く旅の様なものとして眺められ得るし、又光と闇の勢力が行なう大戦争に参加することであるというふうにも描写され得る。又本質的に言って、一つの政治的集団において責任ある市民生活を送ることであるとか、神の王国における臣下の生活を送ることであるとか、或いは次から次と続き決して終ることのない輪廻の一段階にすぎ

ない、などと言うふうに人生は説明されるかも知れない。個人又は自己としての人間は、天上にある好ましい住まいから落ちて肉体に捕えられ、何とかそれから逃れる手だてを考えねばならないような靈魂なのであるというふうに見られるかも知れない。或いはこれとは著しい対照を示すが、自我とか靈魂とかはその真の意味において幻想とも、人間の無智の所産とも、又ヒンズー教で言うマヤーのヴェールとも見られ、それらは正しい洞察によって追い払うことが出来るのであり、かくして我々が歴然たる自我をもっているのだと言う誤った仮定から生ずる人間の深刻な問題を解決することが出来る、という考えもある。或いは又、人間存在は物体の原子の偶然的配列又は盲目的な進化の過程から生み出されたものともみなされるが、その進化の過程は同様に他の方向に向かうことによって異なった様式を生み出したかも知れないのである。人間はその歴史の流れにおいて多くの異なった世界観を展開して来たばかりでなく、その世界の中に存在する人間とは何か、人間の中心的問題は何であり、その問題の解決策は何か、などということに関して多くの

異なった考えを展開して来たのである。それぞれの偉大な文明——別々に存在した部族が正にそうであったが——は、人間存在を理解し、説明し、その方向づけをするためにその様な概念的又は写象的な枠組み(conceptual or imagistic frames)を一つ又はそれ以上にわたって考え出したのである。そして人間は、実体とか人間とかいうものに関するこれらの洞察に従って、人生、組織、価値、実践などに関する考えを形成したり再形成したりして来たのである。あなた方全てにわかってもらえると信ずるが、私がここで話しているのは人類が有するものもろの偉大な宗教的伝統についてである。人間はその宗教的実践、組織、儀礼においてこそ人生の指針(orientation, his)を発見し、人間存在とは何か、如何に生くべきか、などについての説明を見出したのである。或いは、我々はむしろ次の様に言うべきである。つまり、人生における指針を探究することにおいてこそ、又、人間存在とは何か、人生いかに生くべきか、などについての理解に到達せんとする試みにおいてこそ人間は偉大な宗教的伝統をつくり上げそれを発展させたのである。この様にして

人類は人生に関して現在持つに至ったような様々な意味を発見し、これを人間生存に与えて来たのである。

実存に意味を与えるこの様な全体的な説明の枠組みは人間にとり不可欠なものである。我々が人生の方向づけを得て行爲することが出来るのは、我々がその中で生き、行動しているところの文脈についてある概念又は先見の明を持つからであり、又その行動の文脈の中における人間の位置と役割りについてある理解をもっているからである。我々の経験において挿話的・断片的に起るものを一つの大きな洞察へと統一し、組織し、総合する想像力というものがあつてはじめて我々は人間を包む全体的なものを把握し、理解し、説明しようと試みることが出来るのである。従つて、人間がその中で徐々に偉大な文明を創り出したところの様々に異なる地理的状况において、世界とその世界における人間の位置についての非常に多様な概念が発生したことは余り不思議なことではないが、それというのも、いくつかの偉大な文化的・宗教的伝統の中において、人間の想像力がますます異なった視点を生み出し、それを詳しく観察して行つたからで

ある。

人間のもつ想像力の構築的作業は、この様にして常にあらゆる宗教的活動の構成要素であつたが、宗教思想を書きつづる人達はめつたにこのことを理解しなかつた。そこで次の様な問いが出される。即ち、すべての宗教的なものがこの様な想像的性格をもつということは、宗教のもつ規範的意義(normative significance)を我々があきらめてしまわねばならないことを意味するのか、という問いであり、又、もし宗教的洞察と理解についての主張が神の實在との直接的交渉に基づかないというのであれば、その主張は意義と特質を失つてしまつているのであるのか、という問いである。

私はその様には思わない。私がここに描写してきた歴史性というものの現代的理解こそ、そして又世界観とか概念的枠組みとかがもつ機能と重要性を現代的に理解することこそが、まさしく人間の重要性を我々に認識させてくれると共に、我々の宗教的言語・思想の占める当然の地位をも我々に認識させてくれるのである。より大きな概念的枠組み、又は世界像を想像力によつて構築する

ことを停止出来るとか、停止すべきであると考えべき理由はないのである。なぜならば、人生を秩序づけ理解するために世界観又は概念的枠組みを持つということとは、過去における他の世代に対してと同じ様に現代の人にとつても重要なことなのである。従つて宗教とか宗教的思想というものは過去におけると同じくまさに現代も必要なのである——がしかし、今やそれらは明確に、そして本質的に人間の想像力による創造物(human imaginative creations)として再構成されねばならないのである。そうすれば我々は宗教とか宗教的思想を十分に批判的・自覚的活動(fully critical and self-conscious activities)として、かつて可能でなかつた様な仕方では保持してゆくことが出来るのである。例えばキリスト教神学というものは今や本質的に言つて、現代の人間生活に対する方向づけの枠組みとして役立つ様な神的世界観を想像力を持つて構築せんとする試みであると理解されるに至つたのである。すなわち、キリスト教神学とは、明確にそして自覚的に言つて、人間がその中に置かれていた状況に関する解釈(interpretation)又は画像(picture)

をつくりあげようとする試みであると同時に、その状況の中にいる我々の現代的実存に関する解釈又は画像をつくりあげようとする試みであるが、その中心又は焦点は神であり、他のあらゆるものはこの神との関連において理解されるべきことなのである。この神学的任務の中心は、勿論、我々が今日「神」という言葉によつて意味することの出来るものを定義づけたり特色づけたりすることであるが、特に「神」概念が神秘的な起原を持つ觀念から出る用語によつて表現されるばかりでなく、我々が今生きている現実の世界にとつての究極的基準点(the ultimate point of reference)としてそれが考えられるときに、この様な神の定義づけと特色づけが神学的任務の中心となるのである。

私がここで少し話したいことは、この様な神概念の再構成においてキリスト教神学が特にどの様に見えるか、ということについてであるが、その理由は、これこそ私自身が最もなれ親しんでおり、又、私が第一に打ち込んでいる神学的伝統であるからである。この様にして、私が主張している様な種類の宗教的象徴の再構成というこ

とについての具体的な例があなたの方に提供されることになるだろう。私が他の宗教的伝統をもつあなたがたに望んで止まないことは、私のこの様なやり方があなたの方の学問的作業にとって何を意味するかということについて考えていただきたいということである。後ほど討議を行うことによって我々は、この様な神学的方法の採択がどのような仕方であるかという代表者間に対話を促進させるであろうかを知ることが出来る。

もし我々が人間の歴史性というものを私がここで強く主張して来た様な根本的な意味で理解するならば、我々はキリスト教信仰を他のそれぞれの信仰と同様、一つの視点 (one perspective) 、一つの世界観 (one world-view) としてみることになるであろう。そして、この一つの世界観は、今日我々の注目と忠誠心を獲得しようと同様に競い合っている他の伝統と並んで、長い歴史の中で、又歴史を通して発展して来たのである。人がこの様に世界観の概念を自分自身の伝統にあてはめる時、自分の世界観と他の世界観とを区別すると同時に両者を関連づけるのである。このことは自分自身の伝統から少し距離をお

いてみることであり、自分の伝統に対して適切でない打ち込み方をするところから一歩しりぞいてみることを意味する。例えば、キリスト教又は仏教の伝統はあらゆる人間にとって究極的な救済の真理を充分に備えた源であり、従って単にその主な主張が解釈され、(世代から世代へと) 引きつがれることだけが必要なのだ、という確信があるが、その様な確信に基づいて神学の研究作業をするのではなく、キリスト教神学者と仏教学者は本質的にはそれぞれ多くの視点の中の一つの、特殊な視点を認識し、それを統一することに関心を払って来たのだということを我々は理解するに至るのである。この様な洞察によってキリスト教又は仏教の思想に対する批判的質問が出されるが、それは、キリスト教信仰又は仏教的視点の主な教義又は観念は何であるか、今日、その主義や観念をいかに説明すべきか、などという質問ではない。それは、むしろ、人はいかにして一つの世界観、特にキリスト教又は仏教の世界観を統一し、人生に対するその意義をどの様に評価するか、という問いなのである。宗教的思想の任務に焦点をあてるこの様な方法は、伝統色の

濃い宗教的思想を占めていたものとはむしろ違った議題を我々にとりあげさせる様になる。今や次の様に問わねばならないのである。即ち、根本的なカテゴリー (fundamental categories) は何であるのか、検討中の世界観に構造、秩序、経験的な味わい、などを与えるところの根本的な概念的・象徴的枠組み (the basic conceptual and symbolic framework) は何であるか、という問いである。もしこれらのことが確かめられ得るならば、その時こそ、人はこれらのカテゴリー——おそらく、それはむしろ完全に再構成されたもの——が、果たして現代の人間生存を著しく秩序づけ、それに方向づけを与えることが出来るかどうかを理解してみようということが出来るのである。

勿論、一つの世界観に十分な性格と意義を与えるものは複雑な様式をもつ制度や慣習、言葉や象徴、礼拝の営みや道徳的主張、物語りや神話などであり、これらのものは世代から世代へと引きつがれ、その世代に生きる人の経験を表現し、それを説明するのである。これらの表現、様式、実践は必ずしも同等の重要性をもっている

わけではない。それぞれの世界観の基本的構造と性格を決めるものは、それに形と秩序を与えるところの幾つかの根本的なカテゴリーなのである。これらのカテゴリーは、儀式や瞑想、イデオロギーや物語りの中で用いられる言葉や象徴などのより大きな語彙によって結びつけられ、相互に関係づけられるが、その目的とするところは多くの世代がもつ経験の限らない変化とニュアンスを調整したり説明したりすることが出来る様な一つの全体像又は複合の像に対し具体性を与え、その細部を埋めることなのである。世界観を定義づける用語の基本的な配置 (the basic configuration of defining terms of a world-view) のことを私はそのカテゴリー構造と呼ぶのである。従って私の意見ではキリスト教神学者がもつ今日の任務は、多種多様なキリスト教の制度、慣習、礼拝などをはじめ、多様なキリスト教哲学、神学、神話を突き破って、それら全てを性格づける基本的なカテゴリー構造に至ることなのである。

私の見解では、キリスト教的世界観の構造と特質は、神 (God) 、世界 (world) 、人間 (humanity) 、キリスト

「Christ」という四つのカテゴリーによって与えられている（この中で最初の三つ、つまり、神、世界、人間というカテゴリーは特にキリスト教のみに限ったものでなく、ユダヤ教とイスラム教の視点にとっても同様に中心的なカテゴリーなのである）。これら四つのカテゴリーはキリスト教の実体に関する図表を描くための主要な水準点（benchmarks）又は基準点（reference points）を提供する。或いは、比喻を変えて言うならば、これらのカテゴリーは主だったホックやファスナーの様なもので、それに経験、生存、解釈などというキリスト教の網状組織が結びつけられているのであり、又それが網状組織のもつ基本のパターンと性格を決定するのである。これら四つのカテゴリーのそれぞれについて少し述べてみることにする。

「神」は勿論、キリスト教的視点における究極的基準点である。キリスト教の伝統の中においてこのこと（究極的基準点）は、神が存在するものの全ての根源、あらゆる實在の究極的根柢、世界の創り主、歴史の支配者、などと語ることによって表現されて来た。伝統的なキリスト

教思想において、神は主として人格的又は行為者的實在（a personal or agential reality）として考えられた。即ち、神の概念が作り上げられた時に用いられたモデルは人間だったのである。あらゆる人間の生存と思想のためにあるこの「究極的基準点」が今日いかに適切に想定され得るかということが現代の構築的神学（constructive theology）にとって一つの大きな問題なのである。

カテゴリー構造の第二の用語である「世界」は、人間の生存ということがその中で見られるところの全体的な状況に関係しているのである。キリスト教的視点に関する初期の神話形成の説明をみると、この状況は単に「天と地」（the heavens and the earth）として特徴づけられたのである。ところが現代生活において我々はその状況を想像を絶する広大な宇宙として、それが数億光年の広がりを持ち、数十億年という古いものであると考えざるを得ないのである。この宇宙の中には数百万の銀河系があり、この銀河系の一つの中に地球に直接の環境を与えている太陽系があるわけである。ひるがえって、地球は複合の生態系であり、これなくしては人間生存は可能に

ならないのである。勿論、キリスト教的世界観にとって、全てこのことは、ある意味で神の創造として理解されるべきことなのである。

第三番目の主要カテゴリーである「人間」は、この地球上に住み十分に自覚的にして創造的であり、自由をもつ生物であるが、それ故に、生きがために世界において意識的な人生指導を得ようとつとめなければならぬのである。この様な人生指導は、これまでに我々が見てきた様に、人間が想像力を用いて世界像とか人間実存の解釈とかをつくりあげる時に得られるのであるが、その人間実存の解釈は又人間の経験と知識を正当に評価するというやり方で人間実存の基本的可能性や諸問題、更にその補助変数などを説明するのである。現代のキリスト教神学が背負う任務の主要な部分は何かと言えば、人間に適切な人生指導を与えるためには、いかに、そして、なぜ、その様な世界観と人間理解が「神」と「キリスト」への言及を必要とするのかということを示すことなのである。

第四のカテゴリーは「キリスト」であるが、それは一

方では、神は実際には誰で、又何であるか、神の意志はいかに理解されるべきか、そして他方では、真の人間性とは何か、ということについてそれぞれ明らかにするものであるとキリスト教徒が信じている様な我々人間の歴史における人物像である。イエス・キリストという歴史的人物像は、かくして、神と人間の理解に対して具体性と特殊性を与え、それによって人間実存の方向づけにおいて何が規範的であるのかを明確に決定することになるのである。

この様なカテゴリーの四重構造（four-fold categorical scheme）は世界内における人間生存についてなされるキリスト教的理解の全てを定義づけ、決定するのである。キリスト教の語彙における他の言葉、例えば、罪、救い、教会、聖礼典、三位一体、信仰、希望、愛、創造、啓示、等々はこのカテゴリー構造の入念な仕上げ、又は肉づけであるが、この様にしてこの構造は、人間存在とは実際いかなるものか、人生は世界の中においてどの様に送られるべきか、人間の信仰、礼拝、愛、奉仕が何に向けられるべきか、などということについての十分な説

明又は描写を与えてくれるのである。

人間の歴史性についての根元的な概念を元にして研究作業をすることがキリスト教神学であると自己理解する神学——これは本日私がここで説明して来た様な神学であるが——は、このカテゴリー様式の四つの用語全てについて注意深く、思慮深く考察することを望むであろう。この様な神学はキリスト教の歴史に現れた神、世界、人間、キリストに対する異なった考え方から出来るだけ多く学ぼうとするであろうことは勿論、これまで行われて来た異なった主張に与えられ得る根拠をも理解せんとつとめるであろう。しかしながら、この神学はいくつかの大変むずかしい問題にも真剣な目を向けなければならぬのである。即ち、これらの見解の中でどれが人間にとって破壊的であり、有害であり、抑圧的であり、それ故に悪であるか、どの見解が愛、創造性、平和、正義などを推進して来たか、どの見解が、それが教会生活の中でどんなに強力で重要であろうと、今や古めかしく誤解をまねくものであり、又他の時代の「神話体系」であるとみなされねばならないか、どの見解が我々自身の

現代の実存及びその問題点や可能性などについて適切で充分な、そして洞察力に富む理解を与えることを約束するか、などという問題である。要するに、あらゆる神学的主張、あらゆる宗教的イメージとシンボルは前の世代がもった想像力による構築的活動の産物であるという認識のもとに、この神学はどの見解を採用するかを決める前に、伝統的な見解を注意深く、批判的に眺めることを望むであろう。

勿論この様な構築的神学は、キリスト教神学が過去において非常にしばしば行った様に、自己の神学の主張を権威づけ、正当化するものとして神の啓示を請求するということは出来ないであろう。この様な神学はそれ自身を人間の想像力による構築であると理解すると共に、人間がもつ他の見解とか宗教的・世俗的な視点や世界観から出される洞察、批判、修正などに対して自己を開いているのだという考えをもたねばならないであろう。しかし、たしかにこのことは利益でこそあれ、損失ではないのである。我々の神学的記述と主張は単に我々自身のものに過ぎないということ——つまり、それらは研究と思

索における我々自身の勤労の所産であり、想像力をもつて世界と世界の中の人間の位置を予見しようとして我々自身のもつ自発性と創造性が産み出したものであるということ——を率直にかつ適切に認めることは、宗教的伝統の殆んど全てを特徴づける権威主義への誤ったそして非常に安易な動きから我々を解放することであると同時に、我々自身が直接うけつた遺産の外側に横たわる幅広い規模の経験、人生、洞察などに対して我々の心を開くことでもある。

宗教的主張というものは、常に人間の経験と観念の公開売り込み市場 (open marketplace) において最終的に自分自身を証明しなければならなかったのである。つまり、啓示に関する権威、又は特別な洞察、悟り、真理などといったものに訴えることは、しばらくの間はその立場に特別な注目と信用を与えるが、人間の歴史の長い道程をみた場合、一方において、他の立場とか主張が徐々に又は急速に消えさるのに反して、もう一方の立場や主張を知的・文化的な力において生き残らせ、成長させるものは、実際の人間の経験を説明し、解釈し、その方向

づけをする(想像)力だけなのである。我々の宗教的行為が、結局は我々自身の想像的・知的・個人的・共同社会的な行為であり、決して究極的實在の直接的反映とか表現などではないのだということを認めることは、我々に出来るだけ立派な仕事をさせるということにおいて大変役立つばかりでなく、我々自身のものとは大変異なった視点から得られる洞察と理解に対して、出来るだけ我々の心を開く用意をさせるということにおいても大変役に立ち得るのである。

私はここで、お互いに異なった宗教的伝統を代表する人々が共に対話を行うことが何故重要であるのかということについていくつかの結論的な意見を述べたいと思う。我々の対話が何故重要であるのかというならば、それは我々がどの様な伝統の中にいようと、絶対的あるいは最終的な真理というものを誰も持ちあわせていないからなのである。つまり、せいぜい我々が持ち得るものは我々の祖先の洞察や理解であり、これらは全てその時代における彼等の経験や、その時代に直面した諸問題などの影響の下に形成された彼等自身の想像的構築物であっ

たわけで、まさにそれ故に有限であり、限定的、相対的なものである。これらの洞察と理解は、構成された時以来、歴史の過程において想像力に富んだ他の創造的人物によって修正され、増強され、変更を加えられてきたのであるが、これらの洞察や理解にしても、他の全く異なった伝統の中で発展した洞察や理解、視点や世界観などに接することによって利益をうけることが出来るのは確かなことである。従って対話は我々全てにとって価値あるものと言えるだろう。現代において我々が直面する諸問題——核による大惨事において我々が人類を絶滅させるかも知れないという可能性にまで及ぶ問題を含めて——が要求していることは、我々が今日の世界における指導原理を発見しようとするにあたり、人類がその長い歴史の中で積み重ねて来た叡知とか献身とか洞察といったものの全てを我々が持ち寄ることなのである。お互いに対話を行い、どんなに異なった富を各々の伝統が持っていようと、それをお互いが使用出来る様にしたこと、お互いから学べるものを学びとること——この様なことをしないで済ますわけには全くなくなって来て

いるのである。

又、この対話というものが今日の様な方向に向かうべきかについても明確にすべきである。我々は単に自身のもとの異なる見地に関する情報を得る目的だけで対話を行ってはならないのである。我々が共に話合ねばならないのは、それによって今日人類——勿論我々を含めて——が現代世界において人生の指導原理を発見するのを助けるためであり、言うならば、今日我々の直面する前例のない諸問題の中にあつて、真の指導を与えてくれる宗教的枠組を我々が組み立てることが出来る様にするためにこそ対話が必要となるのである。かくして我々は、人類がその長い歴史の中で創りあげたいくつかの偉大な宗教的伝統のもつ基本的様式と構造をいかに認識するかを学ばなければならない。いいかえるならば、(もろもろの伝統の) 基本的カテゴリー構造と私が呼んで来たものを認識する方法を学ぶことであり、これによって我々はお互いのカテゴリー構造を直接比較し合い、今日の人世指導の枠組みとしてのそれぞれの長所と短所を評価することが出来、かくして現代世界における意義

ある人世指導を与え得る一つ、あるいは一群の世界観を組みたてるために我々は更により良い立場に立つことが出来るであろう。

人類というものはその歴史の殆ど過程を見た場合、世界における様々な地理的状況の下に極めて多様な仕方での発展を遂げたが、特に二〇世紀においてそれは一つの人類 (one humanity) へと共に成長を遂げて来たのである。今や核戦争の脅威は、我々が好むと好まざるに拘らず、決定的に一つの共通の運命のもとに我々全てと一緒に縛りつけてしまったのである。従って、我々が受けついできた視野の狭い宗教的・文化的伝統 (the parochial religious and cultural traditions) だけを基礎にして、単に、無批判的に生存を続けることはもはや可能なことでも又望ましいことでもないのである。お互いに対話を行うこと、お互いに理解し合おうとつとめると、我々自身の視点のもつ長所と同様、短所と問題点をもお互いにさらけ出すこと、我々自身のものとはかなり違う立場のもつ洞察と視点を評価することを学ぶこと——こういった種類の動きが今や我々全てに求められて

いるのである。私が本日ここで描こうと試みたことは、人間のもつ宗教性——それは人生や世界の方向づけの探究であり、そのような方向づけを与えてくれる象徴的枠組を想像力によって創りあげること (the imaginative creation of symbolical frameworks)——を理解する一つの方法であり、それは我々が真に実り多い対話に向かつて進むのを容易にするであろうと私が確信する方法なのである。御静聴を感謝する次第である。

〔訳者あとがき〕

ゴードン・D・カウフマン (Gordon D. Kaufman 1925~) 教授はキャンサス州ニュートンに生れ、両親はメノナイト派 (Mennonite) のキリスト教徒。ベセル・カレッジ、ノースウエスタン大学 (社会学修士号) を経てエール大学神学部で神学号を得た後、一九五五年宗教哲学における学位論文「The Problem of Relativism and the Possibility of Metaphysics」で同大学より哲学博士号を取得。この間、一九五三年にメノナイト派教会の牧師となると共に、ボモナ・カレッジの助教授となる。ヴァンダビルト大学の助教授を経て一九六九年にハーバード大学神学部教授となり現在に至る。アメリカ神学会会長 (一九七九—八〇)、アメリカ宗教学会会長 (一九八一—八二) などを歴任。インド、英国などの大学で神学を講

したが、一九八三年の秋、同志社大学神学部客員教授として来日。仏教関係のサーチを行うかたわら、東京、京都などで講演。平和主義者、歴史主義者として、キリスト教を含む世界宗教が現代相応の世界観を人間の想像力によって構築し、宗教間対話を通じて核による人類滅亡を回避するための方法を模索すべきことを強調した。主な著書は、*Relativism, Knowledge and Faith* (1960), *Systematic Theology: A Historicist Perspective* (1968, 1978), *God the Problem* (1972), *An Essay on Theological Method* (1975, 1979), *The Theological Imagination: Constructing the Concept of God* (1981) など。

本稿は、一九八三年十一月十五日、東京で行われた東洋哲学研究所主催の公開講演会における講演原稿である。

(しんしょうじょう・法政大学講師)